



藤田尚男・藤田恒夫●著

『標準組織学 各論 第4版』

書評者

山浦 晶（千葉県立保健医療大学学長／千葉大学名誉教授）



はからずも『標準組織学 各論 第4版』（医学書院）の書評を書くことになった。私の学生時代に名物教授が担当する組織学は難関のひとつであり、厳格に勉強させられたものだが、以来ほぼ半世紀を経て、組織学教科書の書評とは不思議な縁である。

ことの発端は、脳神経外科医でかつ童話作家の藤原一枝氏が、脳神経外科では脳脊髄液の排出については、「arachnoid granulation から静脈洞を経由して大循環に還流する」とされているようだが、これは誤りではないかと、文献付きで指摘されたことにある。藤原氏の示す文献を読むと、確かに私どもの（私だけかも知れないが）思い込みであり誤りであったようだ。

『標準組織学 各論 第4版』562ページには「くも膜果粒は脳脊髄液を硬膜静脈洞に排出する装置であると考えられてきたが、この説は疑問視されている。その理由として、くも膜果粒が生後しばらくしてから出現し、加齢とともに増加すること、多くの動物種においてこの構造が見つからないことなどがあげられる」とある。Weedの説が盲目的に書き継がれてきたもので根拠がないと、大阪大学の橋本一成一派の説（1982～2005年に書かれた）を紹介している。髄液はどこで吸収されるのか、本書が挙げる部位は、脈絡叢、脳室周囲器官群 circumventricular organ（終板器官、脳弓下器官、松果体、交連下器官、下垂体、傍室器官、最後野など～これらの器官では毛細血管が

窓あき型である）や神経周膜管 perineural tube である。

くも膜果粒にかかわる疑問をきっかけに開いた『標準組織学 各論 第4版』であるが、ページを繰るにつれ、著者らの気迫をひしひしと感じるとともに、図の美しさ～組織形態学のもつ美しさ～に魅入ってしまった。“Beauty is truth, truth beauty (John Keats)”の語も引用されている。

今回この書に接し、半世紀も前に学んだ学問に古いというより、きわめて新鮮な感動を覚えたものである。

B5 頁 616 2010 年 医学書院刊
定価 12,600 円（本体 12,000 円＋税 5%）
[ISBN978-4-260-00302-5]